

# 宮迷水

長野まゆみ

うみ  
汪の巻



# 水 迷 宮

汪の巻

SUI MEI KYU  
Mayumi Nagano

長  
野  
ま  
ゆ  
み

すい めいきゆう

# 水迷宮

うみ  
汪の巻

長野まゆみ

Mayumi Nagano

初版印刷／1997年6月16日

初版発行／1997年6月25日

発行者／清水勝

装 画／長野まゆみ

装 丁／泉沢光雄

発行所／河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 03(3404)1201

振替 00100-7-10802

印刷 株式会社享有堂印刷所

製本 加藤製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。

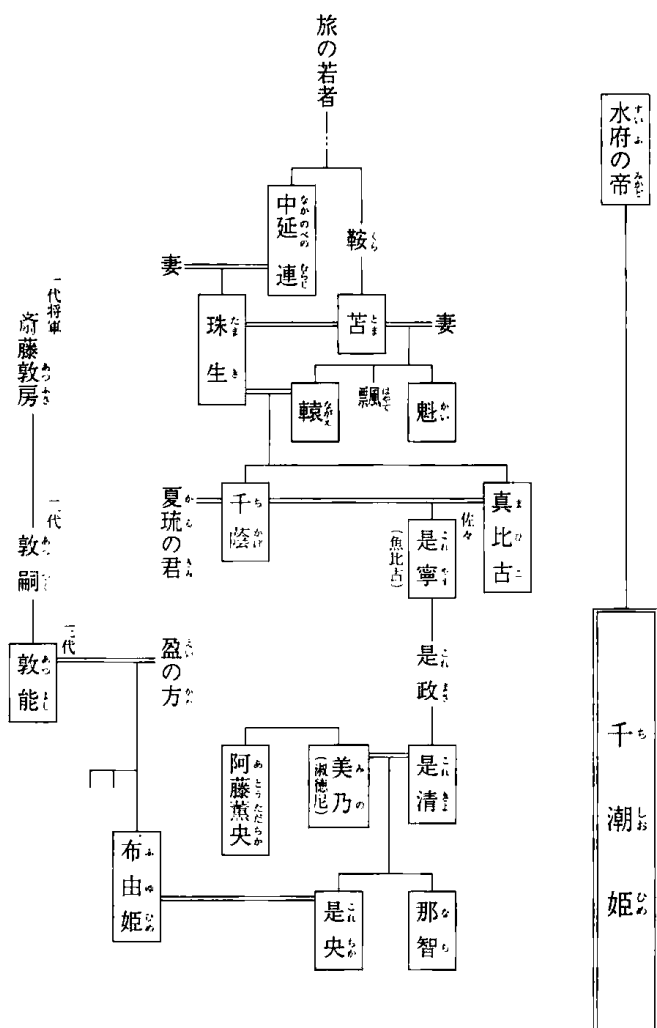
乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

©1997 by Mayumi Nagano. Printed in Japan. ISBN4-309-01157-8

水迷宮

汪<sup>うみ</sup>の巻

# 水迷宫人物系図



— は血縁関係  
- - - は親子関係

〔 〕 は兄弟姉妹  
= は夫婦関係 (または男女関係)

# 其の 一



近江おうみから東方とうほうへくだる街道筋を分水嶺にそつて進むうち、にわかに山の濃こ緑みどりがひらけ、目のまえに碧藍へきらんの海原が見えてくる。波穏やかな白い浜があるかと思いきや突として、巨岩おおいわのそそりたつ岩壁が立ちあらわれた。卯うの花や石楠花しやくなげなどが咲きこぼれ、波に千鳥、風に鸚鵡みぎうが戯れる。

都の貴人きにん武人たちはこぞつて離宮をかまえ、風光明媚な景觀を愛めでた。夏ともなれば、各々人馬おのおのを仕立て、にぎにぎしく訪れる。中延なかのべのしゆ守護ご佐々是政さきこれまさの嫡ちやく子し、十六歳になったばかりの是清これきよも、夏の数日を過ごすため、わずかな伴の者をつれて離宮のある鹿白しかしろの浜へ遊びに来ていた。

「若、ただいま穴子あなご売りの小平次こへいじなるものから聞いたのでございますが、この海には悩ましい女子おなごに身をやつす水の化身が棲すむそうでございますよ。」

傳役もりやくの蔵前ざいぜんは若者の退屈をまぎらそうと、あれやこれや近在の衆の話聞きこんでくる。

「そう、そのことだが、」

夏屋敷の広縁に躰からだを息やすめていた是清は、ゆつくりと起きあがった。蔵前は魚籠くを提さげて簾戸すどをはいつてくる。

「では、若はもうお聞きおよびでしたか。」

初老の蔵前は皺しわだらけの額ひたいに浮かぶ汗を拭ぬぐいながら、若者の傍かたわらへ腰をおろした。

「阿藤あとうの薫央たうちかがな、俺が立つ前の晩に京極きょうごくの屋敷へ顔を見せ、御事おことの耳にいられたいことがあると云つて、知らせに來たのだ。」

「薫央たうちかさまが、」

「あれは、その女を見たといっている。」

「真まことでございますか、」

「だが、見ただけとは意気地のない奴と思わぬか。薫央は女子おなごの御しかたがわからぬ故ゆえな。」

「若はご存じなので、」

蔵前は白髪頭をゆすり、若い主人をからかうように顔をほころばせた。薫央は是清とひとつ違いの従兄で、老侍従の目には若主人よりも数段おとなびて見える人物だった。

「莫迦、そのように真面目くさって訊ねる奴があるか。」

と云いながら顔を紅らめるところが、是清はまだまだ稚いのである。

「ですが、爺といたしましては、」

「百聞は一見に如かずだ。まずは、眺むるといたそう。」

「今からでございますか。逢瀬にはまだ少し陽が高いのでは……、」

「爺、何をはやまっている。俺は景色を眺めに行くと申しているのだぞ、」

「然様でございましたか。爺はまた、てっきり、」

などと云いながら、是清の身仕度を手伝い、後につづいて屋敷の外へ出た。是清は元結の天色も鮮やかに、夏麻に矢車を染めた涼しげな小袖に袴をつけ、

颯爽と歩きだした。

「伴はいらぬ。ひとりで充分だ。」

「そうはまいりません。若の傳役は殿から固く云い遣ったことでございますれば、」

若主人の凜々しい姿に目を細めていた蔵前だが、やおら厳しい顔になった。

是清はすでに走りだして、海岸へ向かう手近な岩場の道をのぼっている。蔵前は大慌てで駆けだしたが、いくらも進まないうちに息を切らし、大粒の汗をかいた。巨岩をひとつつ乗り越えるのがやっとである。是清は屋敷を見下ろす小高い崖のうえで、老いた侍従にやさしく声をかけた。

「爺、そのように慌てると転ぶぞ、」

「若、」

「大丈夫だ。すぐに戻る。そなたは戻って穴子飯でも拵えておればよいのだ。

案ずるな。俺が身の危うくなるようなことをすると思うか。その程度の分別は

あるぞ。」

次に蔵前が見あげたとき、崖のうえにはもう是清の姿はなかった。老侍従は追うのをあきらめ、すぐごと屋敷のなかへ戻った。こうなつては若主人の分別とやらを信じるしかない。

体よく蔵前をふりきつた是清は、従兄いとこの薫央ただちかに教えられ道をたどつて海沿いの岩場を歩いてゆく。しかし、薫央の覚えが不確かなのか、是清が迂闊うかつなのか、いつのまにか道に迷つていた。仕方なく、松林のなかをむやみに進んだ。松葉が青々と茂り、下生したばえの草いきれは潮のかおりとないまぜに強い芳香をはなっている。鶯とびの聲が高らかに飮くだました。是清は道を見失つたことも忘れ、潮風に吹かれて気ままに歩きまわった。

「何者ぢや、ご領内ですぞ、」

不意に是清の横手から鋭い声がして、侍女らしい年増の女が姿を見せた。地味な表着うわぎをまとい、どこぞの侍女かお女中の風情である。

「これは失礼をいたしました。道を見失つての不始末、どうかご容赦ください。」

是清はただちに詫びて、来た道に戻ろうとした。

「お待ちなされ。」

「……何か、」

「その道はなりません。」

女にはどこか威圧するような調子があつて、是清は訝しげに眉をよせた。

「しかし、私はこの道からまいりましたので引き返そうかと、」

「ただ今はなりません。海辺へ降りられた姫さまが、まもなくその道を通つてお戻りになります。しばらくの間、ご遠慮ください。」

「では、こちらのご領地は、その姫の、」

「はい。御園院大納言さまのご息女、千潮姫さまの離宮でございます。」

四辺には巨岩と松の原がつづくばかりで、屋敷らしい建物は何も見えなかつ

た。さぞや広い領地なのであろう。御園院大納言の名は、是清の耳になじみはなかつたが、彼の知らない貴族は都に数知れない。それにしても、姫のために道をあけろとは、己も随分怪しまれたものだ、と、是清は苦りきっていた。都へ戻れば、中延なかのべの若君はたいそう凜々りりしいご立派なお方と、流言うわさにのぼるほどの若者だったのである。それを鼻にかけていたわけではないが、姫に狼藉ろうぜきを働くと云わんばかりの侍女のことは、是清の自尊心を傷つけた。

「侍女どの、それほどこの私が粗忽そこつに見えるか。姫がお通りならば、さがって道をあけるくらいの謹みは持っているぞ。」

「ご無礼はお詫び申しあげます。ただ、私はこの道へ何人なにびとも通さぬよう、姫さまからきつく申し受けておりますれば。」

「何故なにゆえだ。」

「……そ、それは、」

侍女は思わせぶりに口ごもった。これまでの抑制のきいた調子に似合わない。

是清は怪しく思つたが、何分事情のはつきりしないことばかりだったので、この侍女から聞きだせるだけのことは聞いておこうと考えた。

「何か、特別なご事情なのだな。訊ねてはご迷惑か、」

「……はい、姫さまに口外は禁じられております。」

「そうか。ならば、無理には訊くまい。それで、どの道に戻ったらよいのだ。

私は鹿白の浜にある屋敷まで戻りたいのだが。」

「鹿白の。あのお屋敷なら存じております。では、佐々是政殿の家中の御方で、」

「ああ、嫡子の是清だ。」

「然様でございましたか。たいへんなご無礼をいたしました。女ばかりの屋敷の用心ゆえ、何卒、お赦しくださりませ。」

女は慇懃に頭をさげた。

「いや、かまうな。ご領地へ侵入した私に落ち度がある。速やかに立ち去ろ

う。」

「では、こちらへ、」

是清は侍女に案内あんないされて別の道を進んだ。そこは鹿かの子百合こゆりなどところどころ咲いた木蔭こかげの道で、是清が先ほど歩いてゐた崖沿いの道を迂回するものらしい。やがて、ふたつの道が交叉するところへ出た。侍女の視線につられて顔を向けた是清は、彼が遠慮せよと云われた道の先に、呉藍くれなゐほかしも艶あでやかな衣裳をまとった女の後ろ姿を見つけた。数人の侍女たちが寄り添かかっている。女の黒髪は水にぬれて陽に照り映え、つやつやと耀かがやいていた。

「あの御方が、千潮ちしお姫か。」

「はい、水天宮さまのお参りから戻られたところにございます。姫さまは毎日、昼と晩の二度、祈願のためのご水浴にいらっしゃるのです。」

「水天宮へ、水浴にと、」

是清はこの侍女の真意をはかりかねてゐた。わざわざ道を迂回させて姫から

遠ざけておきながら、こんどは是清の若い心を乱すようなことを口にする。水浴と聞いて、是清はあらぬ幻想を抱いてしまった。

「……侍女どの、」

「さあ、こちらでございます。」

侍女は素知らぬふうで是清の手をひき、崖下を臨む道の端へでた。眼下はすでに青い海原が横たわり、白い波頭が見えた。水際には荒々しい岩だながつづいている。そんな景観のなかに、浮き島があった。海面へせりだした崖の裾へ、寄り添うかたちで浮かんでいるのだ。全体は濃い緑の樹木でおおわれ、島のようすは皆目わからない。

「佐々どの、ご覧になれますか。あの浮き島に水天宮の祠があるのです。ございますよ。昼間は潮がひいて、崖下の岩だなを渡ってゆくことができます。夜は小舟を漕いで渡らなければなりません。浮き島に潮が満ちることはありませんが、たいへんな大波がくると、祠も海水に涵ひたされます。もとより滾々なみなみと地の

底から湧きだす水があつて泉をつくり、潮水と真水とがまじりあうのでございます。それは鏡のように澄んだ水でございますよ。」

「して、泉にはどんな御利益が、」

「それは申しあげられません。願かけというのは、満願の日まで密かに通うものでございましょう。」

「確かに、」

ならば何故こんな話を聞かせるのかと、是清は侍女を恨みたい気持ちになつていた。彼の脳裏には千潮姫の水浴する姿がくり返しあらわれ、ひとりでに顔が紅<sup>あか</sup>らんだ。是清は姫の姿をはらうように頭を振り、鹿白の浜へ向かつて歩きだした。

「もし、」

「御免、私はこれにて、」

是清は侍女の呼びとめる声に、さらに歩調を速めた。これ以上かかわつては、